

水理実験センター報告投稿規定

1. 投稿資格

水理実験センター報告（以下「センター報告」と呼ぶ）に投稿する論文は、水理実験センター報告会で講演したものに限る。投稿者が学外者・学生・院生の場合は、学内者（本学教職員）との連名とする。

2. 原稿の受理

原稿は指定された期日まで受付ける。受理にあたっては、水理実験センター教職員によって構成される編集委員会による査読の結果、その可否を決定する。

3. 原稿の種類

原稿の種類は、報文、研究ノート、資料、講演要旨などとする。

4. 原稿の長さ

図表を含めた刷上りページ数で原則として次のように制限する。報文は12ページ以内、研究ノートは6ページ以内、講演要旨は1ページとし、そのほかはこれらに準ずる。

5. 原稿の提出

原稿の提出にあたっては、所要事項を記入した所定の投稿票を添付すること。原稿には必ず正本にコピー1部を添付すること。

6. 原稿の書き方

原稿は和文で書き、執筆要領に従うこと。

7. 原稿の返却

原稿は原則として返却しない。図版の返却を希望する場合は、その旨を投稿時に投稿票で申し出ること。

8. 校 正

著者校は初校のみとし、再校以降は編集委員会によって、著者校に従って行いが、初校ミスは著者の責任とする。著者校での校正は原則として誤植に限り、新たな書き込みや削除は特別の場合を除き、認めない。

9. 別 刷

報文、研究ノートに関し、50部までは無料とし、それ以上は著者の実費負担とする。

10. 以上の規定は、センター報告第7号以降の投稿に対して適用する。

水理実験センター報告執筆要領

1. 標題は原稿内容の最も適切な要約であるようにすること。なお、原稿の第1枚目に標題(和文・英文の順)、著者名(和名・ローマ字の順)を書き、脚注に著者の所属・機関名を明記すること。

本文は、原稿の第2枚目から書くこと。また、本文についての脚注は認めない。

2. 原稿 原稿用紙と文字 水理実験センター原稿用紙(22字20行)を用いる。ただし、数字および欧文等は1マスの中に2字分を書く。

文字は黒か濃い青のインキまたはボールペンで書く。文章は口語体とし、できるだけ当用漢字・新かなづかいによる。外国語は原表記(タイプするか活字体で書く)する。

数式と特殊な文字について 数式は2行分以上とり、文字の種類、大小、数字を明瞭に区別できるように記入すること。特殊な活字(太字体・斜字体・ギリシャ文字・ロシア文字など)の指定は著者が赤鉛筆で行なう。斜字体(イタリック)は下線()を、太字体(ゴシック、ボールド)は波下線()を用いる。ギリシャ文字には α などを書く。特に動植物の学名や数量を示す記号での斜字体の用い方は、次のように統一する。

1) 動植物の学名はイタリックにする。

2) 数量を表わす記号はイタリックにする。

3) 添字が数量あるいは番号に対応する場合にはイタリックにする。ただし添字が言葉の意味を表わす場合には

立体にする。

例：物理量，番号を示す添字： C_β , $\Sigma a_i \Psi_i$, $\Sigma a_{iz} b_z$, g_{ik} , P_x

ことばの意味を示す添字： $Cg(g=\text{gas})$, $gn(n=\text{normal})$, $\mu r(r=\text{relative})$, $Ek(k=\text{kinetic})$, $Xe(e=\text{electric})$

4) 一つの量は一つの文字で書く。

5) ベクトルはイタリック・ボールド (***A***, ***a***) 指定は A, a (以下略)。

図表は必ず別紙とする。

文章の書き出し，および改行は必ず1字分あけて書き始める。句点・読点および括弧などは1字分をあてる。同格の名詞をきるときは，1字分として「・」を間に入れることを原則とする。

原稿には必ずページの番号をふる。

3. 文献 文献は論文の末尾に列記し，本文中の文献は下記によって書くこと。

本文中の引用は次の例にならない，著者の姓（まぎらわしい場合は名も併記），発表年を書く。

引用例：佐倉(1974, p. 10)はこれを……と呼んだ。林(1974a, pp. 33~35)によれば……，

国土地理院(1973)によれば……，これらの研究(Izumi, 1975; 飯島, 1981b)によると……，
……という見方もある(Kawamata, 1976; 甲斐, 1981)。

共著の場合の例：中川・桜井(1982)は……〔2人の場合〕 小島ほか(1974)は……〔3人以上の場合〕

Nakajima and Tada (1981) は……〔2人の場合〕 Yamasaki *et al.* (1983) は……〔3人以上の場合〕

文献表は邦文のものを先にし，著者名の五十音順に並べる。欧文のものは後にして著者名のアルファベット（著者本人の慣用綴りによる）順に並べる。同じ著者のものは年代順に並べる。同じ著者でも同一年のものがある場合は，引用順に a, b, c ……を付して並べることを原則とする。著者3人以上に及ぶ場合でも，文献表では全著者名を列記することを原則とする。

文献表の例：

井口正男(1975)：『漂砂と流砂の水理学』古今書院，290p.

国土地理院(1973)：『沿岸海域基礎調査報告書（豊橋・伊良湖岬地区）』建設省国土地理院，63p.

池田 宏(1975)：砂礫堆からみた河床形状のタイプと形成条件。地理評，48，712-730.

佐倉保夫(1978)：水温による地下水循環の研究。市川正巳・榎根勇編著：『日本の水収支』古今書院，291-303.

Yoshino, M. M. (1975) : *Climate in a small Area*. Univ. of Tokyo Press, Tokyo, 549p.

Kotoda, K. (1979) : Wind profile and aerodynamic parameters above and within a plant canopy. *Ann. Rep., Inst. Geosci., Univ. of Tsukuba*, No. 5, 23-27.

Yoshino, M. M. (1971) : Some aspects of the ITC and the polar frontal zones over Monsoon Asia.

Yoshino, M. M. ed. : *Water Balance of Monsoon Asia*, Univ. of Tokyo Press, Tokyo, 549p.

Ono, Y. (1980) : Glacial and periglacial geomorphology in Japan. *Progress in Physical Geography*, 4, 149-160.

上例のように，欧文単行本名，欧文雑誌名はイタリック体（指定は赤色で ）とする。雑誌の巻数は太字（ボールド）体（指定は赤色で ），巻号のある雑誌で巻ごとに通しページならば号数は省略し，号ごとにページが変わる場合には3-4，1-21のように書く。巻がなく号のみのものは，6号，No. 6のように書く。ページ数は単行本では総ページ数，雑誌（論文集）では論文の最初と最後のページを一でつなげて書く。

4. 図表 白紙または淡青色方眼紙に必ず墨で書くこと。図中の文字や数字は縮小率を考慮し，レタリング・タイプ・トーン・写植文字などを用いて著者が書くのを原則とする。

図表は各図，各表ごとに別紙とし，小さいものは原稿用紙大の紙に貼る。1組の図表が数枚に分かれる場合には1枚の紙にまとめて貼る。表は組むのが大変なので，特にていねいに書き，たとえば小数点はたてに必ずそろえるようにするなど，心配りをする。また図表は1枚ごとに右隅に著者名，番号を記す。1組の図表の場合にはさらに a, b, c ……を付して表わす。図表の表題は，和文にする。図の表題や説明文で活字で印刷するものは別の

原稿用紙に書く。

1) 図について 本誌の文字の組み方 1 ページに左右 2 段、22 字ずつを組み、それ以下の幅の組み方はしない。したがって図・表の左右の幅のとり方は 1 段分とるか 2 段分とるかの 2 種類しかない。図の場合、1 段分なら幅 6.5 cm、2 段分なら幅 14.5 cm が最大である（ちなみに天地は、表題・凡例を含み 20 cm が最大である）。図を作成する場合には、予期する刷上り図の幅にもとづいて原図の幅と高さを決めること。

図中の文字の大きさ 印刷されたとき、幅 1 mm では小さすぎ、3 mm では大きすぎる。1.5～2.0 mm ぐらいがちょうどよい。原図の文字の大きさや太さの決定には、種々の程度に縮小した図表を参照するとよい。図の刷上りの大きさを著者自身が指定する上記の標準幅に従って幅何 cm と図中空白部に青エンピツで指定すること。著者による指定があっても実務上の必要を生じたときは編集委員会が独自に指定し直す。

原図の大きさ 長さで刷上りの大きさの 1.5 倍から 2 倍程度が望ましい。

図の説明 編集のときには、図の説明の紙片を付けて原稿とともに印刷所に入れるから、活字で組む図の説明はまとめて原稿用紙に書き、本文の後に付けること。

2) 表について 表を組む場合には、できるだけ整理・加工・集約化したものとし、なまのデータを載せることは避けるようにする。表の型式をできるだけ単純にすることは、読みやすくするためにも望まれる。著者自身で可能な限り、欧文または和文タイプでタイプ打ちするとよい（この場合は図の書き方に準じて作成されたい）。

なお、流れ図のような、不規則な斜線のあるものは、たとえ文字が大部分でも、図として原稿を作製し、図として番号・説明を書くこと。図と表の番号は、それぞれに通し番号を付し、第 1 図、第 1 表のような表現を用いる。また、表の番号とその表題は、表の上部に記し、表のデータの出所は表の右下に記すこと。

3) 写真は、印画紙に焼付けられたものを原図とし、白黒写真に限る。さらに写真は原稿用紙大（A 4）の白紙にはり、組み方および大きさの指定は図と同様に扱うこと。

ERC Papers に関する規約

1. 誌 名 誌名は Environmental Research Center Papers No. ____ とする。
2. 目 的 水理実験センター（以下「センター」と呼ぶ）の諸施設を使用して行われた研究成果のうち、学協会誌等への掲載が技術的に困難な内容の成果、たとえば総合報告や学位論文等を広く国内外に発表することを目的とする。
3. 編集委員会 センター所属の教職員の中からセンター長が任命する委員若干名によって編集委員会を構成し、投稿原稿の掲載の可否や経費の負担などについて審議する。
4. 発行頻度 不定期とし、発行時期は編集委員会で決定する。
5. 発行部数 発行の都度編集委員会で決定する。
6. 構 成 原則として各号 1 論文とする。
7. 投 稿 投稿希望者は、毎年 4 月末日までに、題目、頁数をセンター長まで申し出る。投稿にあたっては、ERC Papers 投稿規定に従うこと。
8. 経 費
 - ① 印刷費
イ、著者に本学教職員が含まれる場合は、センター経費で一定額の印刷費を負担する。これを超過した費用は著者の負担とする。一定額については発行の都度編集委員会で定めることとする。
ロ、著者が学外者あるいは学生・院生のみの場合は、原則として著者が印刷費を負担することとする。
 - ② 別刷費
単著・共著にかかわらず、別刷 100 部の印刷経費はセンターで負担するが、これ以上の部数の別刷費は著者の負担とする。
 - ③ 発送費
センターが通常発送している宛先への発送費はセンターで負担する。センターが通常発送している宛先以外への発送費は、50部まではセンターの負担とし、その宛先は国内外、個人・機関を問わない。50部を越える分についての発送費は著者の負担とする。
 - ④ その他の経費
カラー写真、折込、袋入、特殊紙等の経費は原則として著者の負担とする。
9. 以上の規約は、ERC Papers No. 4 以降の投稿に対して適用する。

ERC Papers 投稿規定

1. 投稿資格 ERC Papers に投稿する資格を有する者は、水理実験センター（以下「センター」と呼ぶ）の諸施設を使用して行なった研究成果を発表しようとする者に限る。
2. 原稿の受理 指定された期日まで受付ける。受理にあたっては、センター長が指名する査読者の判断に基づき編集委員会でその可否を決定する。
3. 原稿の提出 原稿は編集委員会まで提出する。
4. 原稿の書き方
 - ① 原稿は英文で書き、ダブルスペースでタイプする。
 - ② 数式・記号の字体指定は著者が朱書する。
 - ③ 複雑な表はなるべくそのまま凸版の版下となるよう明瞭に描くかタイプする。
 - ④ 図はそのまま凸版の版下となるようにする。
 - ⑤ 図（写真を含む）と表は、Fig. 1-1, Table 2-1 のように番号をつけ、図表ごとに別紙とする。図表の説明文は別の用紙に一括して書く。
 - ⑥ 以上のほか、細目については ERC Papers の最新号を参照する。
5. 校 正 校正は著者がすべて行う。
6. 著作権 内容（本文・図・表）の著作権はセンターに帰属する。ただし、内容についての責任は著者が負う。
7. 別 刷 100部までは無料とし、それ以上は著者の実費負担とする。
8. 以上の規定は、ERC Papers No. 4 以降の投稿に対して適用する。

1982年度 水理実験センター施設利用状況

	教 育 関 係		研 究 関 係	
学 群	1. 地形営力論実験受講者	10人×7回=70人	卒業研究利用者	
	2. 気候学・気象学実験受講者	12×3=36	自然科学類 6人 2ヶ月~12ヶ月	
	3. 水文学演習受講者	7×1=7		
	4. 基礎水文学受講者	46×1=46		
	5. 水文測定論受講者	25×1=25		
	6. 水科学実験受講者	13×10=130		
	7. 農学実験(気象環境)受講者	35×1=35		
	8. 水文学実験受講者	10×7=70		
	9. 応用水文学受講者	20×1=20		
	小 計	439人	小 計 6人	
大学院	10. 水収支論研究法受講者	5人×10回=50人	地球科学研究科	7人 7ヶ月~12ヶ月
			環境科学研究科	3人 11ヶ月~12ヶ月
			地球科学系研究生	2人 6ヶ月~12ヶ月
		小 計 50人	小 計 12人	
教 官	1~10の指導		地球科学系教官	2人 3ヶ月~4ヶ月
			地球科学系技官	1人 4ヶ月
		小 計 10人	小 計 3人	
その他	1. 研究会・シンポジウム・共同研究等		163人	
	・河川における土砂の動態に関する研究会		(10人×2回=20人)	
	・農業気象学会「水研究部会」研究会		(6×1=6)	
	・浅層地下水国際研究会		(19×3=57)	
	・水文コロキウム		(20×1=20)	
	・リモート・センシング技術の利用実証に関する共同研究 (科学技術庁資源調査所と共同)		(46÷8+6=63)	
	2. 工作室利用者延		170人	
	3. 測器・資料・施設等利用者延		2,312人	
	4. 見 学 者		120人	
	・国 内 者		41人	
	・国 外 者		79人	
	筑波地区化学工学懇話会(化学工学協会所属)		(23人)	
	GROUNDWATER RESOURCES DEVELOPMENT 研修生		(11人)	
	北京化工学院訪日代表团		(8人)	
	米国・国防省 DEPENDENTS SCHOOL の中・高校 校長及び副校長一行		(33人)	
			総 計 3,285人	

主 な 行 事

年 月 日	記 事
1982. 6. 18	筑波地区化学工学懇話会会員、センター施設見学 23名
6. 30	昭和57年度第1回水理実験センター運営委員会開催 出席者：吉野、吉沢、梶根、新藤、西沢、鈴木、砂村、古藤田 議 題：昭和56年度会計報告、昭和56年度事業報告、昭和57年度予算執行（案）について、昭和57年度運用計画について、昭和58年度概算要求について
7. 30～8. 1	河川における土砂の動態に関する研究会開催（出席者 10名）
8. 2	農業気象学会関東支部「水研究部会」研究会開催（出席者 6名）
9. 16～17	地下水資源開発集団研修のため、アジア・アフリカ・中東諸国より11名が水理実験センター熱・水収支圃場にて研修
9. 20	水理実験センター報告第6号発行
10. 2	中国農業気象考察団一行センター施設見学 6名
10. 25	中国北京化工学院訪日代表团一行センター施設見学 8名
11. 9～10	飯島技育 防火管理者取得講習会出席
11. 18	昭和57年度第2回水理実験センター運営委員会開催 出席者：吉野、鈴木、吉沢、新藤、梶根、西沢、砂村、古藤田 議 題：昭和59年度概算要求について
12. 2～ 3	日中浅層地下水研究者交流研究会開催（出席者15名、中国側4名、日本側11名）
12. 18	リモート・センシング技術の利用実証に関する共同研究（科学技術庁資源調査所と水理実験センター）第1回観測
1983. 1. 22	同 上 第2回観測
2. 10	ERC Papers 第2号発行
2. 18	米国 Defence Dependents School の中高校校長・副校長一行、センター施設見学 33名
2. 25	昭和57年度水理実験センター年次研究報告会開催 発表数 30
2. 26	昭和57年度第3回水理実験センター運営委員会開催 出席者：吉野、鈴木、吉沢、西沢、梶根、新藤、古藤田 議 題：昭和57年度運営報告、昭和57年度会計報告、昭和58年度運営計画
3. 8	ERC Papers 第3号発行
3. 29	パリ第11大学学長一行4名来訪